羽犬塚射場ノ本

福岡県筑後市大字羽犬塚所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書第17集

1995

筑後市教育委員会

羽犬塚射場ノ本

1995

筑後市教育委員会

序

羽犬塚射場ノ本遺跡の発掘調査は、県道前津久富線道路改良工事に伴って、平成6年度に道路拡幅予定地内に所在する埋蔵文化財の調査を行ったものです。

今回の調査では、非常に興味深い位置で立派な道路跡が発見されたり、複数の竈をもつ住居跡が確認されるなど、さまざまな新知見を得ることができました。特に道路跡は、市内を縦断すると考えられる「西海道」とのかかわりが注目され、今後の検討が期待されます。

この報告書は、記録的猛暑だった今夏と冬の2次にわたる調査の記録であり、今後の文化財保護思想普及の一助として、また、学術研究の資料として、ひろく活用されることを願ってやみません。

おわりに、この報告書の刊行にあたり、いろいろと御指導いただいた関係各位と連日の発掘調査に参加された皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成7年3月

筑後市教育委員会
教育長　森　田　基　之

例　　言

1、本書は、福岡県八女土木事務所が実施した、県道前津久富線道路改良工事の事前調査として筑後市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2、発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。調査関係者は第Ⅰ章に記した。なお、調査記録並びに出土遺物は筑後市教育委員会が保管している。

3、今回の調査に用いた測量座標は国土調査法第２座標系を基準としている。また、水準は東京湾の平均水面を、方位は座標北をそれぞれ基準とする。よって、特に記載のない限り、標高は海抜高を、北は座標北を表わす。

4、本書に掲載した遺構実測図は、永見秀徳・塚本映子・大島真一郎・岡崎陽子・奥村太郎が行い、遺構全体図については航空写真測量を実施し、写測エンジニアリング㈱に委託した。また、遺構写真は永見・大島が撮影し、上空からの撮影は㈲空中写真企画に依頼した。

5、本書に掲載した遺物実測図及びすべての図面の浄書は平塚あけみが行った。また遺物の写真撮影については小林勇作・碓井当磨が行った。

目　　次

Ⅰ．調　査　経　過 …… 1

Ⅱ．遺跡の立地と歴史的環境 …… 3

Ⅲ．調　査　成　果 …… 8

Ⅳ．小　　結 …… 21

Ⅰ. 調 査 経 過

筑後市の街路事業の一環として、県道前津久富線の改良工事が実施される。その結果、片側１車線片歩道付の道路は片側２車線両歩道付に生まれ変わる。今回の羽犬塚射場ノ本遺跡の発掘調査は、この県道前津久富線改良工事によって消滅する同遺跡の記録保存のために実施したものである。

平成５(1993)年、福岡県八女土木事務所から福岡県教育庁南筑後教育事務所に対して試掘調査の依頼がなされた。そして、試掘調査の結果、路線の一部に遺跡の存在が確認され、工事前に発掘調査が必要となった。その後、福岡県八女土木事務所から筑後市教育委員会に対して発掘調査を依頼する旨の協議申し入れがなされ、協議の結果本遺跡の発掘調査は、筑後市教育委員会が平成６年度事業で実施することとなった。さらに平成６年５月、隣接する羽犬塚中学校の防球ネット移設工事との兼ね合いで、北側の３ｍ部分を先行調査し、残りの部分はその後に調査を実施して欲しいとの申し入れがなされた。調査が都合２次にわたるが止むを得ないとの結論に達し、北側の先行調査部分を第１次調査とし、残る部分を第2次調査として実施することで合意した。

第１次調査は、平成６年７月12日～８月４日にし、第２次調査は、平成６年12月16日～平成７年２月17日まで実施した。

なお、羽犬塚射場ノ本遺跡発掘調査の体制は次のとおりである。

調 査 主 体　筑後市教育委員会

総　括　教　育　長　森 田 基 之

教 育 部 長　津 留 忠 義

庶　務　社会教育課長　下 川 雅 晴

社会教育係長　松 永 盛四郎

社 会 教 育 係　野 口 順 子

（文化財専門職）　永 見 秀 徳（調査担当）

（文化財専門職）　小 林 勇 作

（文化財学芸員）　塚 本 映 子（嘱託、平成６年７月15日～）

発掘調査参加者　塚 本 映 子（調査補助員、平成６年７月14日まで）

大 島 真一郎（調査補助員、平成６年８月１日～）

奥 村 太 郎　原　善 光　浅 山 頼 子　牛 島 蓉 子

太田黒 三 枝　椛 島 美恵子　北 島　清　北 島 トモエ

古 賀 妙 子　瀬 戸 八重子　津 留 フヂエ　平 尾 仁 子

村 上 幸 子　村 上 美津子　吉 開 朝 子　大 塚 政 夫

上 井 八重子　中 沢 やよい　平 井 良 治　森 山 美津子

吉 田　裕　吉 田 喜美子　田 川 孝 江　今 村 鈴 子

岡 崎 陽 子　占 賀 明 美　深 町 順 子　馬 場 孝 司

壇　ちゑ子

整理作業参加者　平 塚　あけみ（整理補助員）

桜 木 千 鶴　野間口 靖 子　馬 場 敦 子

深 川 善 子　湊　まど香

また、表土除去は㈲福島建設に、気球写真撮影は㈲空中写真企画に、遺跡全体の航空測量は写測エン

ジニアリング㈱にそれぞれお願いした。

このほか、発掘調査から報告書の刊行に到るまで、筑後市文化財専門委員　佐田茂氏（佐賀大学教授）、福岡県教育庁南筑後教育事務所の浜田信也、伊崎俊秋の両氏をはじめ、次の方々から貴重なご指導、ご教示を頂いた。記して感謝の意を表わしたい。（順不同、敬称略）

水野正好（奈良大学）、赤崎敏男・大塚恵治（以上、八女市教育委員会）、萩原裕房、近澤康治（以上、久留米市教育委員会）山田元樹・坂井義哉（以上、大牟田市教育委員会）狭川真一・山村信榮・井上信正（以上、太宰府市教育委員会）柴田剛（財団法人君津都市文化財センター）

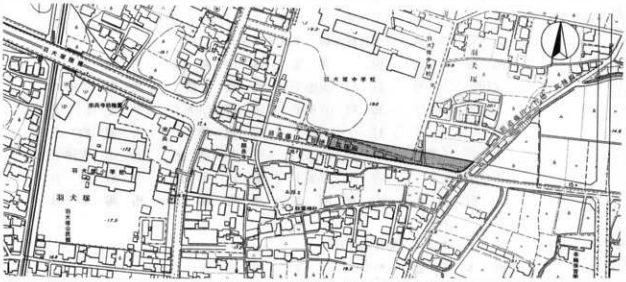


Fig.1　羽犬塚射場ノ本遺跡調査地点位置図（1/5000）

Ⅱ．遺跡の立地と歴史的環境

本書で報告する羽犬塚射場ノ本遺跡は福岡県筑後市大字羽犬塚字射場ノ本に所在する。

筑後市は筑後平野の南部にあり、北は久留米市、東は八女市・広川町、西は三潴町・大木町、南は瀬高町に接している。主要都市からは、久留米市から南に12km、大牟田市から北へ21kmの距離にある。

筑後市は地形的にみると、北に背振山系、東に水縄山系から釈迦御前山系、南に筑肥山系をのぞむ平野に展開する。水縄山系・釈迦御前山系から八女市・広川町を経て西南西にのびる八女丘陵は、釈迦ヶ岳に源を発する矢部川の右岸に、ちょうど掌をひろげたように市の北東部から有明海に向かってのびている。市内は標高５～40ｍ内におさまり、山地から低湿地に漸移する典型的な地形を呈している。

今回報告する羽犬塚射場ノ本遺跡は、筑後市のほぼ中央に位置し、八女丘陵末端の低丘陵南斜面に展開している。付近は葡萄や梨の栽培がさかんで、今回の調査範囲も、一部は葡萄畑であった。

続いて、市内の主な遺跡を時代を追って概観してみることにする。現段階では旧石器時代の遺跡として確認されたものがないため、以下、縄文時代以降の主要遺跡について紹介する。

縄文時代の遺跡は、市南部に集中しており、長崎坊田遺跡や上北島裏山遺跡が知られている。上北島裏山遺跡では集落跡を確認し、押型文土器が出土している。そのほか、鶴田岸添遺跡の周辺でも押型文土器が表面採集され、集落の存在が予想される。

弥生時代の遺跡は、時期によって大きく様相が異なる。まず、弥生時代前期から中期初頭までは、原則的に縄文時代の状況とよく似ていて、遺跡は市南部に集中している。この時期の遺跡としては、常用遺跡や常用梅島遺跡、上北島平塚遺跡などが知られている。ところが、中期中頃に様相は一変する。市内の全域に集落が営まれるようになり、その数も激増する。例を挙げると、蔵数森ノ木遺跡、前津鯉ノ谷遺跡、裏山遺跡等がある。後期には、多量の焼失住居を検出した鶴田岸添遺跡もある。

古墳時代も、その直前の弥生時代終末期の集落が存続しているが、その過渡期の集落遺跡として上北島狐塚遺跡や前述の蔵数森ノ木遺跡は特に興味深い遺跡である。また、古墳時代中期に入ると、石人山古墳を初源として岩戸山古墳、善蔵塚古墳、乗場古墳、鶴見山古墳と、八女丘陵を東に推移する大規模な前方後円墳が造られるようになる。さらに、これらの大型前方後円墳とは別に、欠塚古墳や弘化谷古墳等の古墳が点在するように築造される。

奈良時代には、前津中ノ玉遺跡、若菜森坊遺跡等がある。また、市内のほぼ中央を縦断するように推定「西海道」が走り、延喜式にみえる「葛野駅家」を筑後市大字前津字車路付近に比定する説がある。

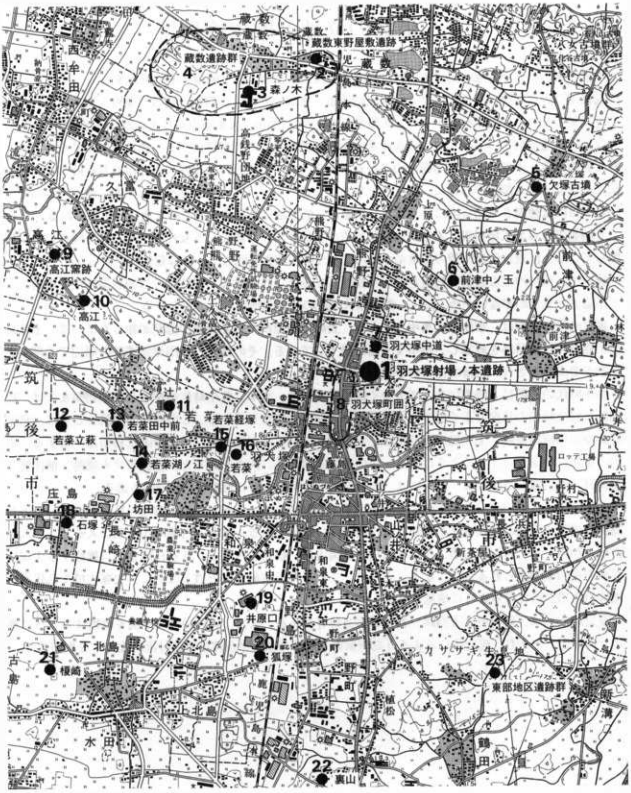


Fig.2 周辺の遺跡分布図（1/25000）

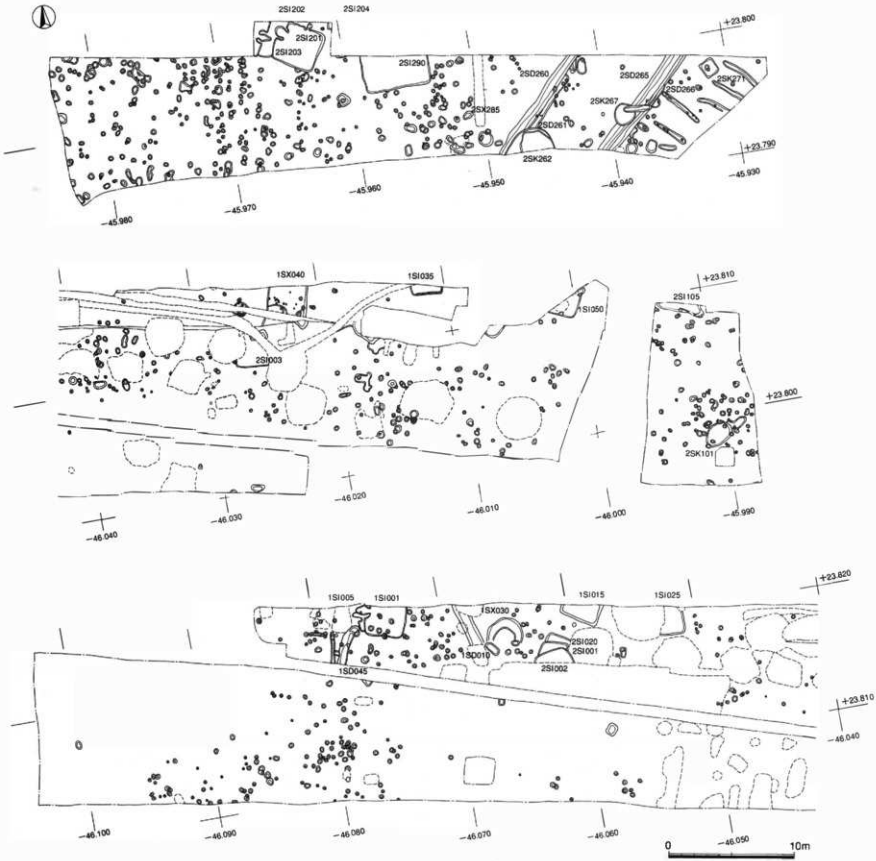


Fig.3 羽犬塚射場ノ本遺跡遺構配置図（1/300）

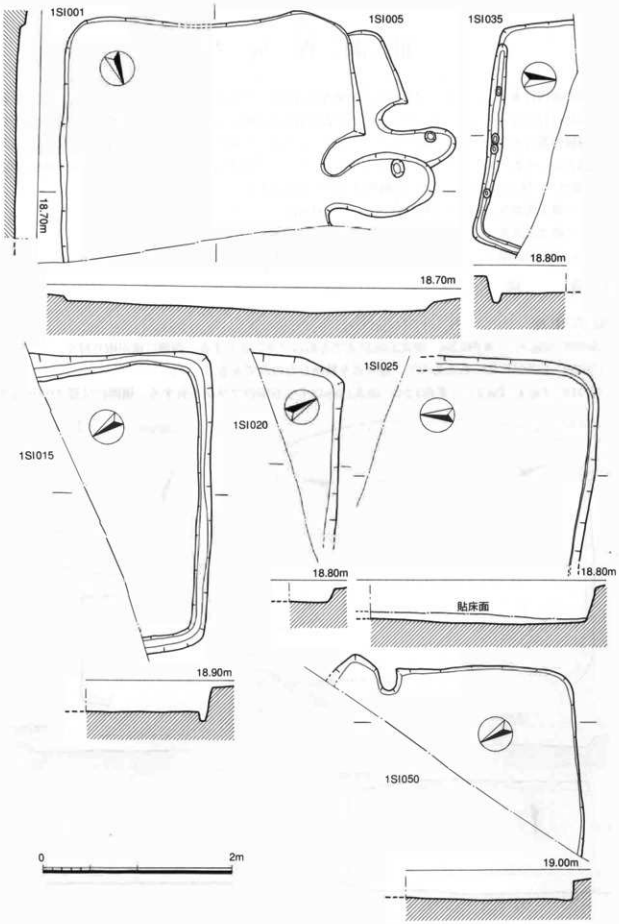


Fig.4　1SI001・015・020・025・035・050実測図（1/40）

Ⅲ. 調 査 成 果

今回の報告にあたって第１次調査と第２次調査を遺構番号の表記を工夫することによって識別し、報告は同時に行うこととした。その方法として調査次数を遺構略号の前に出し、遺構略号の後に現場でつけた遺構仮番号を３桁にして記載することとした。また第２次調査に関しては、A・B・C の３区に区分して調査し、それぞれに同じ仮番号が存在することから、遺構番号設定に際してＡ区を001～099、B区を100番台、C 区を200番台とした。掲載例は次のとおりである。

・第１次調査　S－10　溝遺構　……　1SD010

・第２次調査　C区S－1　竪穴住居　……　2SI201

上記のことを前提として、以下に報告を進めることとする。

(1) 遺　　構

竪穴住居

1SI001（Fig.4）　東西3.2m、南北2.3m以上で方形のプランを有する。西側に竈が取り付く。

1SI005　1SI001に切られるもので、竈付近を検出したのみである。

1SI015（Fig.4、Pla.2）　東西3.2m、南北1.9m以上で方形のプランを有する。周囲には深さ0.1m内外

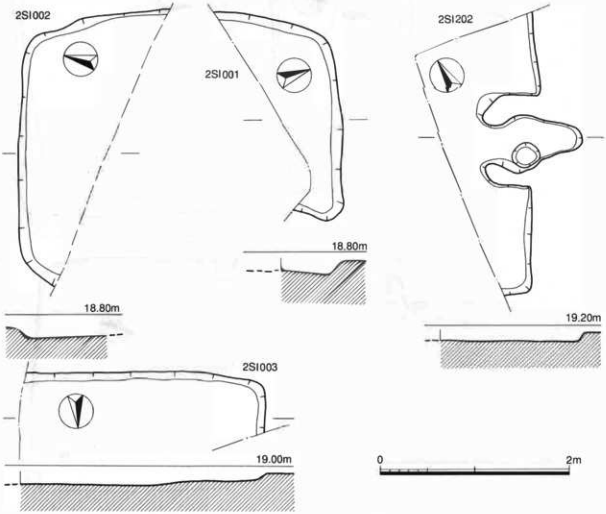


Fig.5　2SI001・002・003・202実測図（1/40）

の壁溝が巡っている。壁溝部分には壁に沿うように縦方向の堆積層が確認されている。

1SI020（Fig.4、Pla.2）　1.0m以上×1.9m以上で方形のプランを有するものと考えられる。2SI001に切られている。埋土の主体は暗茶色砂質土である。

1SI025（Fig.4）　南北2.4m以上、東西2.1m以上で方形のプランを有するものと考えられる。埋土は水平方向に数層分層できたが、主体は黒茶色砂質土である。

1SI035（Fig.4、Pla.3）　南北0.9m以上、東西2.5mで方形のプランを有する。南及び東側に壁溝が観察され、深さは2～10㎝程度で随所に小ピットがある。ピットは溝底から5㎝程度である。

1SI050（Fig.4）　南北2.55m以上、東西2.0m以上で方形のプランを有するものと考えられる。東側に竈が作られる。埋土の主体は黒茶色砂質土である。

2SI001（Fig.5）　2SI002に切られ、1SI020を切っている。東西2.0m、南北1.4m以上で略方形のプランを有する。

2SI002（Fig.5）　2SI001を切っている。南北1.5m以上、東西約2.9mで略方形のプランを有する。

2SI003（Fig.5）　2.6m以上×0.7m以上で方形のプランを有するものと考えられる。

2SI105　東西3.5m、南北0.7m以上で南東隅に竈が取り付くものとみられるが、判然としない。

2SI201（Fig.6）　今回の調査で全体が知られる唯一の住居跡である。東西3.55m、南北3.3mでほぼ方形のプランを有する。北西側面北寄りに竈があるが、北東辺中央部にも小型の袖竈がある。埋土の主体は黒茶色砂質土である。

2SI202（Fig.5）　2SI201の西側で2SI201の竈を避けるように竈を設定する。南北3.0m以上、東西1.3m以上で、方形プランと想定できる。

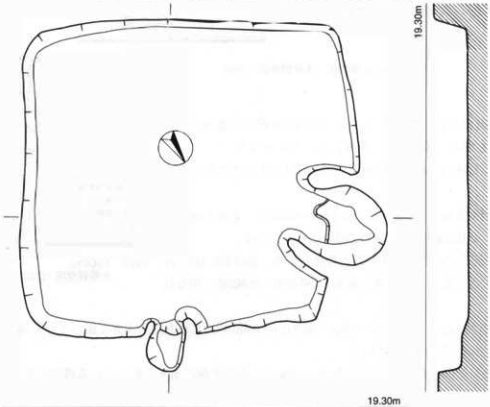


Fig.6　2SI201実測図（1/40）

2SI203　2SI201に東側を、2SI202に西側を切られており詳細は明らかではない。

2SI204　2SI201の東側に近接して検出されたが、壁の一部を調査した以外は調査区外にあり、詳細は不明のままである。

2SI290

（Fig.7、Pla.3）

東西5.37m、南北3.0m以上で方形プランを有するものと思われる。東壁の調査区境床面に焼土が確認され、これより北側に竈のある可能性が考えられる。

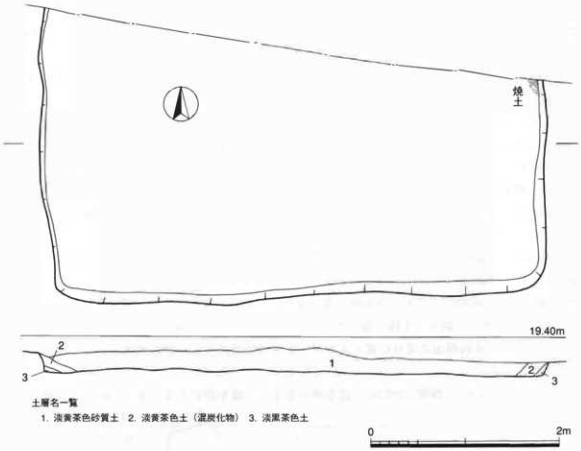


Fig.7　2SI290実測図・土層観察図（1/40）

溝

1SD010（Fig.8）　検出長3.4m、幅0.95～1.1m、深さ0.3m程度で北西に振っている。延長部はいずれも攪乱で破壊され、明確にはできなかった。

1SD045　検出長3.5m、幅0.7m内外、深さ0.3～0.5m程度で北でやや蛇行している。

2SD260（Fig.9）　検出長9.8m、幅約0.8m、深さ0.4～0.5mで、北東方向に大きく振っている溝である。2SD261を切り、2SK262に切られている。

2SD261（Fig.9）　検出長5.2mで調査区中程からはじまる。幅は約0.4m、深さ0.15mで、北東方向に大きく振っている溝である。2SD260・2SK262に切られている。

Fig.8　1SD010
土層観察図（1/40）

2SD265（Fig.9）　検出長9.4m、幅約0.75～0.9m、深さ0.4～0.6mで、北東方向に大きく振っている溝である。2SD266を切り、2SK267に切られている。

2SD266（Fig.9）　検出長9.5m、幅約0.5m、深さ0.2～0.3mで、北東方向に大きく振っている溝である。2SD265に切られている。

土　坑

2SK101（Fig.9、Pla.6）　2.2×1.6m、深さ0.6mを測る楕円形の土坑である。北寄りの中程に直径0.2m程度のピットがあるが、土層観察の結果、この土坑の埋没途中で穿たれていることが判明した。したが

Fig.9 2SD260・261・265・266・2SK101・267 土層観察図（1/40）

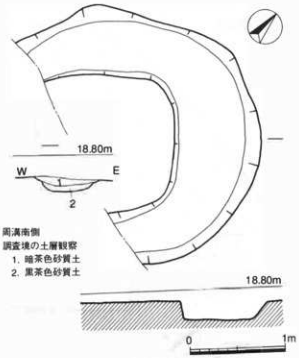


Fig.10 1SX030実測図・土層観察図（1/40）

って土層図にみる2と4の間の埋没には時間差のあったことが窺える。

2SK262（Fig.11、Pla.4） 東西3.95m、南北1.8m以上で西側にテラス状の平坦部がある。深さは最深部で約0.7mを測る。

2SK267（Fig.9、Pla.4） 2SD265を切る土坑で、1.65×1.75mでほぼ円形を呈するもので、深さは0.5m内外である。

2SK271（Fig.11、Pla.5） 1.3×1.15m、深さ0.25m内外で隅丸方形の土坑である。中央を他のピットに切られている。

その他の遺構

1SX030（Fig.10、Pla.6） 外周の直径2.8m、溝幅0.6～0.9m、深さ0.2m内外の円形周溝状遺構である。溝によって囲まれた中央部は隅丸の略方形を呈している。中央部には遺構は確認されていない。

1SX040（Pla.7） 東西3.1m、南北2.5m以上の溝状を呈する遺構である。底部は平坦で小さなピットが多数確認された。埋土は大きく2層に分けられ、上位は埋没時の黒色砂質土、下位は暗黄茶色粘質土で硬化している。なお小ピットは硬化面除去後に確認された。路面の可能性が考えられるが、南側の第2次調査では確認されず、北側は調査区外となり全体の形状は明らかではない。

2SX285（Fig.11） 0.5×0.4m、深さ約0.4mのピットである。

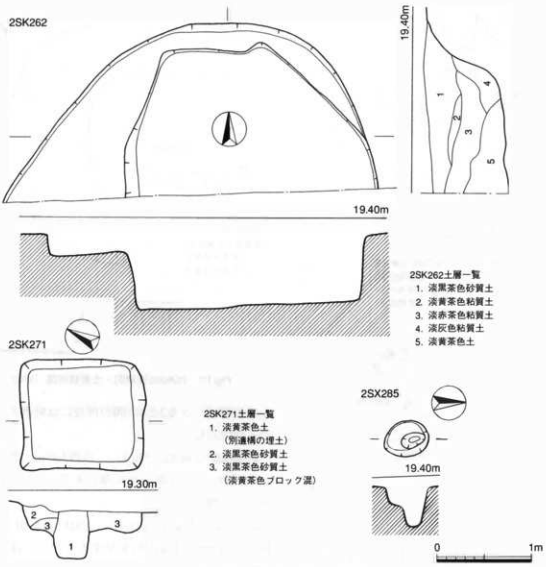


Fig.11　2SK262・271・2SX285実測図及び土層観察図（1/40）

(2) 出 土 遺 物

竪穴住居出土遺物

1SI015出土遺物（Fig.12、Pla.8）

土師器

皿（3）　器高2.5㎝程度。外面下半部は手持ちヘラケズリののち粗いナデを施し、内面はヨコナデである。外面全体に赤色顔料を塗布する。

竈（1）　移動式竈の破片で、外面全体を粗いハケ目で調整する。内面はヘラケズリで仕上げるが、庇の接合部分は内外面ともにかなり強めのナデを行っている。口縁部の一部及び庇内面に煤の付着がある。

須恵器

蓋（2）　口径13.8㎝。天井部外面は回転ヘラケズリを施すが中心に近い位置にヨコナデが認められることから、摘みの有する蓋であったと考えられる。

1SI050出土遺物（Fig.12、Pla.8）

土製品

土錘（7・8）

7は長さ5.6㎝、8は4.5㎝以上、両者とも最大径1.5㎝で中央に直径3.5㎜の穿孔がある。

2SI105出土遺物（Fig.15）

土師器

坏（7）　口径14.0㎝、器高3.5㎝以上。内面から外面の上位にかけてはヨコナデ、外面下半は手持ちヘラケズリで調整される。

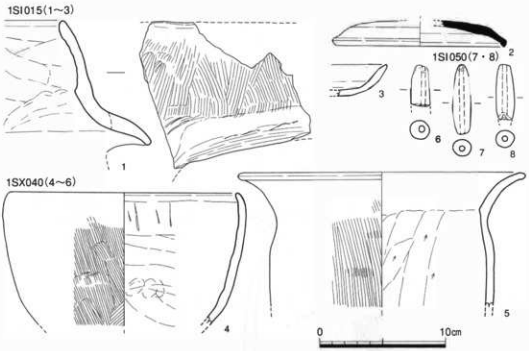


Fig.12　1SI015・050・1SX040出土遺物実測図（1/3）

皿（8）　口径18.0㎝、器高2.4㎝以上。体部外面から底部内面の一部にかけてはヨコナデ、見込み中央付近はナデ、底部はヘラケズリを施した後ナデを行ったものとみられる。

甕（9）　口径15.4㎝。口縁部付近はヨコナデ、体部外面は縦方向のハケ目、内面は斜め上がりのヘラケズリである。口縁部折り曲げに際しての指圧痕が外面に僅かに残存する。

土製品

土錘（10）　長さ6.2㎝、最大径1.7㎝、中央部に径0.5㎝の穿孔がある。表面には指圧により成形された痕跡が明瞭である。

2SI201出土遺物（Fig.13・14、Pla.8）

土師器

椀（1・2）　1は、口径18.0㎝に復原される。調整は内外面とも手持ちヘラミガキで仕上げられ、さらに赤色顔料が塗布される。2は、口径16.0㎝、器高5.3㎝を測る。外面の底部はヘラケズリ、他はヨコナデされる。内面に成型時の指圧の痕跡が僅かに確認できる。

甕（3～7）　すべて体部外面は縦方向のハケ目、5を除く内面はヘラケズリである。個別の特徴をみると、4の内面には粘土紐の痕跡が明瞭に観察され、5ではヘラケズリののち横方向のナデとみられる調整で仕上げているがほとんど擦痕は観察できず、指圧と思われる痕跡が随所に認められる。また、6は口縁部及び体部中程を打ち欠いているものとみられ、内面が著しく黒変し、表面の風化も他の出土品に比べて進んでいる。西側竈内から出土しており、支脚に転用されたものと考えられる。

竈（8）　口径23.0㎝、器高24.1㎝、底径41.0㎝を測る。庇部分は残存してないが移動式竈と考えられる。裾の口縁付近はヨコナデ、体部外面は縦方向のハケ目、内面は上位が横方向のナデ、下位が横方向のハケ目である。口縁部はヘラ状工具できれいに面調整される。成形に際しては上下逆にして製作したようである。

甑（9）　底部の破片で、底径12.0㎝に復原される。端部はヨコナデ、外面はハケ目、内面はヘラケズ

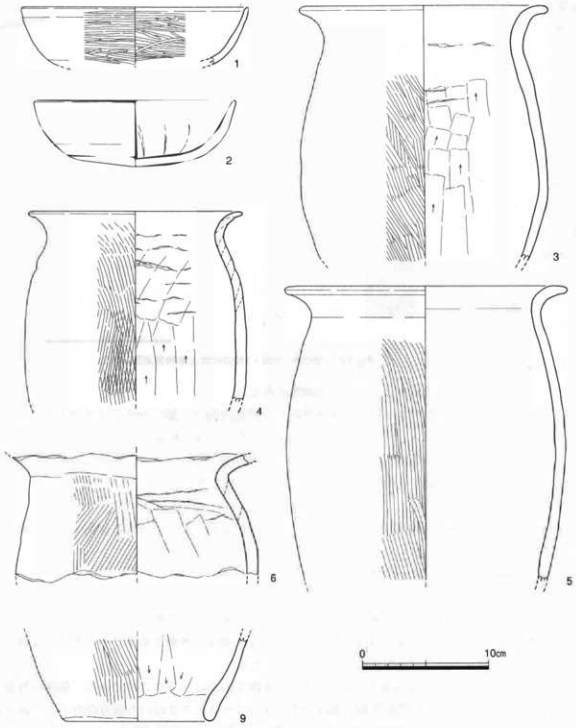


Fig.13　2SI 201出土土器実測図1（1/3）

リである。

鉄製品（Fig.17）

釘（1）　残存する長さ10.1㎝、断面は方形で厚さ0.4㎝。先端部を欠失する。

2SI203出土遺物（Fig.15、Pla.8）

土製品

土錘（2）　長さ5.0㎝以上、最大径1.8㎝、中央部に径0.5㎝の穿孔がある。

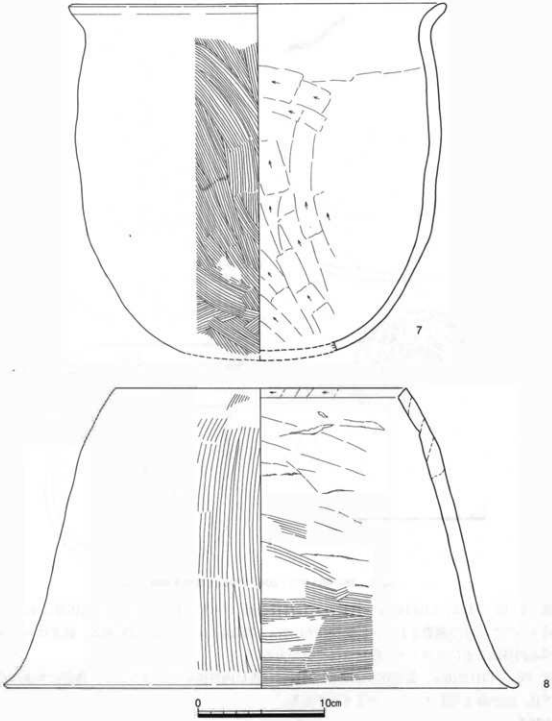


Fig.14　2SI201出土土器実測図２（1/3）

2SI204出土遺物（Fig.15）

須恵器

蓋（1）　口径21.0cm、器高3.1cm以上。残存する部分のすべてでヨコナデ調整されているが、天井部外面の立ち上がり付近に焼成前に付着した指の跡が目立つ。

2SI290出土遺物（Fig.15、Pla.8）

土師器

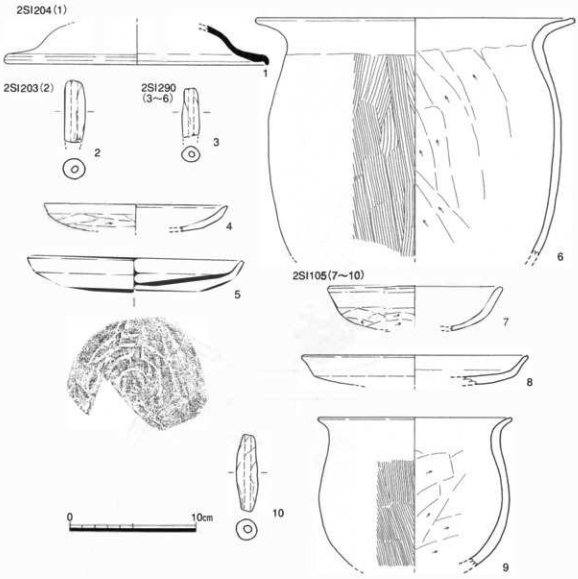


Fig.15　2SI105・203・204・290出土遺物実測図（1/3）

Ⅲ（4・5）　4は、口径14.6cm。内面から口縁部外面にかけてはヨコナデ、外面底部は全面にわたり手持ちヘラケズリで調整される。5は、口径17.2cm、器高2.7cm、底径9.8cmを測る。底部はヘラ切りされ、体部は内外面ともにヨコナデ、見込みはナデである。

甕（6）　口径25.6cm、器高18.9cm以上。口縁部付近は内外面ともにヨコナデ、体部の外面は縦方向のハケ目、内面は下から上へのヘラケズリである。

土製品

土錘（3）　長さ4.0cm以上、最大径1.4cm、中央部に径0.4cmの穿孔がある。表面には指圧により成形された痕跡が明瞭である。

土坑出土遺物

2SK262出土遺物（Fig.16、Pla.8）

須恵器

高坏（1）　底径11.0cmで低脚のものである。内面に縦線状のヘラ記号がちょうど対になるように2条

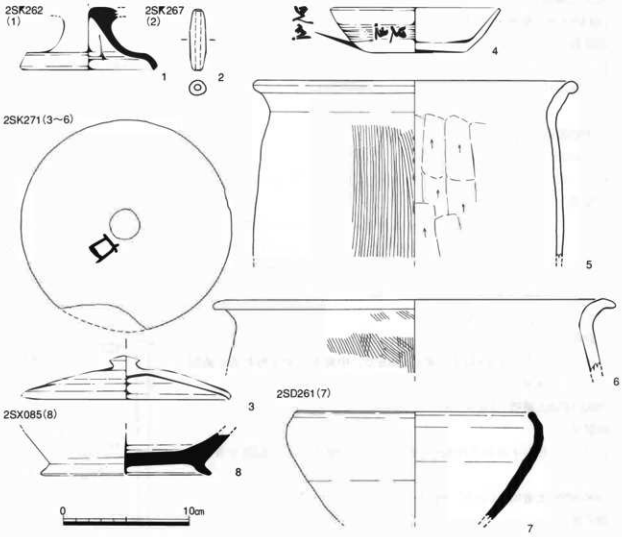


Fig.16　2SK262・267・271・2SX085・2SD061出土遺物実測図（1/3）

存在する。

2SK267出土遺物（Fig.16、Pla.8）

土製品

土錘（2）　長さ4.9cm、最大径1.3cmで、中央部に直径0.4cmの穿孔がある。

2SK271出土遺物（Fig.16、Pla.8・9）

土師器

蓋（3）　口径16.7cm、器高3.5cmで、やや扁平化した宝珠形の摘みが付く。調整は内面全体から口縁部にかけてヨコナデ、天井部は摘みの接合部を除いて回転ヘラケズリである。天井部外面の摘みに近い位置に墨書がある。

坏（4）　口径13.6cm、器高3.6cm、底径8.0cmで、底部はヘラ切りされ、内面全体及び体部外面はヨコナデである。体部外面に横方向で墨書があり「足立」と判読できる。

甕（5・6）　口径26.1・32.2cm。外面はハケ目、口縁部付近はヨコナデである。5の内面はヘラケズリ、6の内面は残存する範囲内でヨコナデである。

溝出土遺物

2SD261出土遺物（Fig.16）

須恵器

鉢（7）　口径19.2cm。底部は失われるがおそらく尖り底と思われる。残存部分の多くはヨコナデであるが、体部外面下半は回転ヘラケズリ、内面下半はナデである。

その他の遺構出土遺物

1SX040出土遺物（Fig.12、Pla.8）

以下に報告する遺物はすべて硬化面の上にかぶる埋没土中から出土した。

土師器

鉢（4）　口径18.0cm、器高10.5cm以上で体部はわずかに内湾しつつ立ち上がる。外面の調整は口縁部付近がヨコナデ、それ以下が縦方向のハケ目である。内面は成形時の指圧痕跡が多数残るが最終調整はヨコナデである。口縁部内面に縦方向の工具の当たりが多数残る。

甕（5）　口径23.0cmに復原できる。口縁部はヨコナデ、外面は縦方向のハケ目、内面は底部から上位に向かうヘラケズリである。

土製品

上錘（6）　長さ3.3cm以上、直径1.4cmで、中央からやや外れるが直径4mmの穿孔がある。

2SX219出土遺物（Fig.17）

鉄製品

釘（2）　残存する長さ10.9cm、断面は方形で厚さ0.5cm。頭部を欠失する。

2SX285出土遺物（Fig.16、Pla.8）

須恵器

壷（8）　高台径13.6cm。残存する範囲内ではヨコナデ調整であるが、痕跡から外面下半は回転ヘラケズリされた可能性がある。

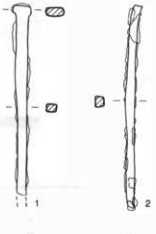


Fig.17　羽犬塚射場ノ本遺跡出土鉄器実測図（1/2）

その他の出土遺物

包含層出土遺物（Fig.18、Pla.8・9）

土師器

坏（1・9）　1は、口径10.0cm、器高3.2cm、底径8.7cm。底部は手持ちヘラケズリで仕上げる。9は口径12.0cm、器高3.4cm、底径7.2cm。外面底部は回転ヘラケズリで、体部との境目も同様に面調整される。

小皿（2・3）　口径10.6cm、器高2.4・2.75cm。外面底部をヘラケズリし、内面はナデで仕上げる。

皿（4～6）　口径13.8～15.0cm、器高2.8～3.5cm。底部はヘラケズリ調整され、外面には赤色顔料が塗布される。なかでも4は特に残存状態がよい。

椀（7・8・10）　7・8は丸底で、底部はヘラケズリされる。9は平底で、その底部は丁寧な回転ヘラケズリで仕上げられ、体部は内外面ともにヨコナデ、見込みはナデである。

蓋（11）　摘みの部分で最大径4.8cmと大きなものである。

甕（12・13）　12は口径16.2cm。外面はハケ目、内面はナデによって仕上げられる。13は口径21.6cmで、外面はハケ目、内面は縦方向のヘラケズリである。

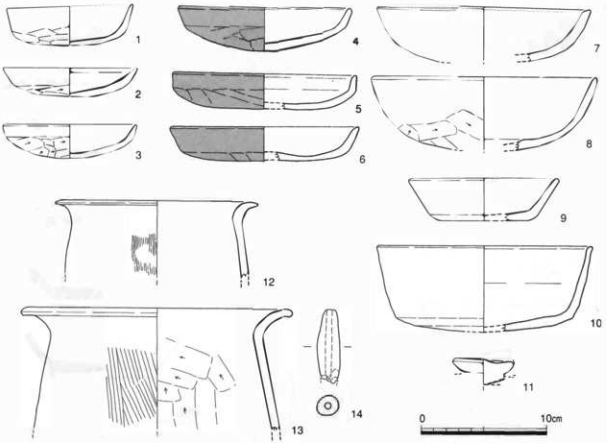


Fig.18　包含層出土遺物実測図（1/3）

土製品

土錘（14）　長さ5.9㎝、最大径1.8㎝で、中央部に直径0.45㎝の穿孔がある。

表土出土遺物（Fig.19、Pla.9）

土師器

小皿（1）　口径12.6㎝、器高2.8㎝で、底部はヘラケズリされる。口縁端部から外面全体にかけて赤色顔料が塗布される。

皿（2・3）　口径15.0・15.2㎝、器高2.9・2.5㎝を測る。底部はヘラケズリされる。

坏（4～7）　4は外面にヘラ書き文字がある。文字は焼成後に書かれたものとみられ、線の周囲に剥離が目立つ。5は口径14.1㎝、器高4.3㎝。底部は回転ヘラケズリされる。6は底部に墨書があるが判読できない。7は口径13.4㎝、器高3.4㎝で、底部は回転ヘラケズリであるが底部中心には及んでいない。なお外面の底部に「井」字状のヘラ記号があり、見込みに「吉」とみられるヘラ書き文字（焼成前記載）がある。

小鉢（8）　口径9.6㎝。外面の多くをヘラケズリで仕上げ、内面は指圧ののち粗いナデ調整である。口縁部付近は内外面ともにヨコナデである。

須恵器

蓋（9・10）　9はやや背の高い摘みを有する。天井部はヘラ切りのままである。10は口径17.0㎝に復原されるもので、天井部はヘラ切りののち粗い面調整を行う。なお天井部中央付近にヨコナデが認められることから、摘みを有する資料であったと考えられる。

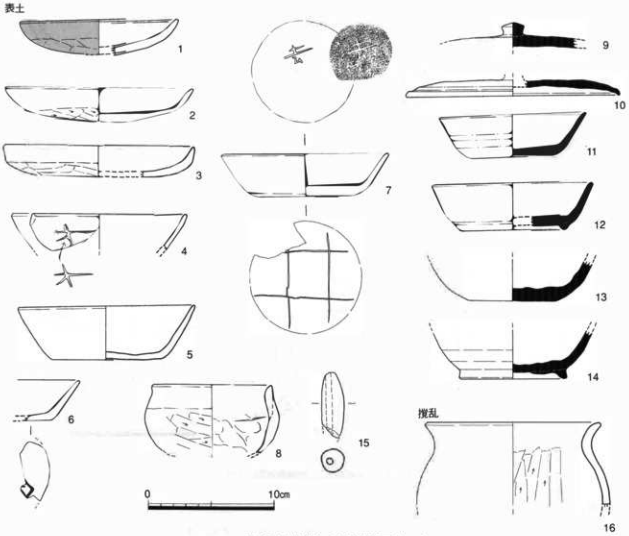


Fig.19　表土及び撹乱出土遺物実測図（1/3）

坏（11・12）　11は無高台の坏で口径11.9cm、器高3.4cm、底径7.0cmを測る。底部はヘラ切りされる。12は押しつぶされたような高台を有する資料で、口径12.8cm、器高3.8cm、高台径8.7cmである。

壺（13・14）　13は平底で、外面の体部から底部全体にかけて回転ヘラケズリで仕上げる。内面は強いヨコナデである。14はやや外方に張り出す高台を有するもので、高台径8.5cm。体部外面下半には回転ヘラケズリされた形跡がある。

土製品

土錘（15）　長さ5.3cm、最大径1.8cm、中心からやや偏ったところに直径0.5cmの穿孔がある。

撹乱中出土遺物（Fig.19）

土師器

甕（16）　口径14.0cm。内面はヘラケズリ、外面は風化が著しく調整は不明である。

Ⅳ. 小　　結

今回の調査で検出した遺構の年代等を簡単に検討し、まとめとしたい。

竪穴住居　出土遺物をみると基本的には在地産の土器で形成されており、その年代は7世紀後半から8世紀代を中心とするものである。直接住居に伴わないが、同時期の土坑や包含層中に墨書されたものが数点あり、この集落に居住する集団を示唆するものとして重要である。

溝　4条検出した溝のうち2SD260・265、2SD261・266は各々対になっていると考えられ、その方向はほぼN－45°45′－Eで等しい。遺構の前後関係 は前者が新しいものの、出土遺物が乏しく具体的な時期差を求めるまでには至っていない。両者は概ね8世紀の範疇で捉えられるものである。

さて、各溝に挟まれた空間は道路と考えるのが一般的である。これを道路とすると、溝心心間で6.5m、内側の肩を結ぶ距離を路面幅とすると5.5～5.8m（小尺で約20尺）となる。これは大宰府近辺に見られる官道（路面幅約9m／小尺で約30尺）や近年本市が調査を行った鶴田市ノ塚遺跡検出の道路（路面幅約9m／小尺で約30尺）に比較するときわめて小さい。前記した例はいずれも西海道の本線と考えられることから、今回検出したものはそれに取り付く支線的な道路遺構ではないかと考えられる。

今回の調査では墨書遺物を持つ集落と道路の一部が検出されたことから、周辺に官的な遺構が存在している可能性が高まってきたといえる。この近く（筑後市大字前津字車路付近）を延喜式にみえる「葛野駅家」の所在地と想定する意見もあり、奈良時代の筑後市を知る上でこの羽犬塚射場ノ本遺跡は重要な位置にあることは明らかであり、今後の周辺の調査を緻密に実施する必要性を感じる。

P L A T E

凡　例
遺物図版において15-5は
Fig.15掲載の５の遺物を指す

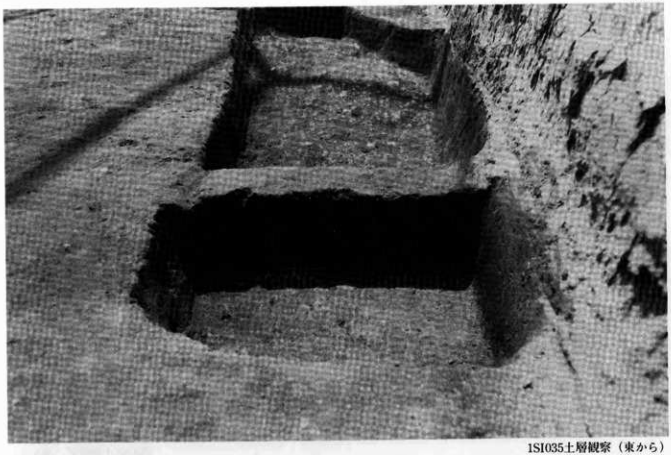
羽犬塚射場ノ本遺跡　第２次調査区（全景　西から）

羽犬塚射場ノ本遺跡　第２次調査区（全景　東から）

Pla. 2

1SI015（南西から）

1SI020（北から）



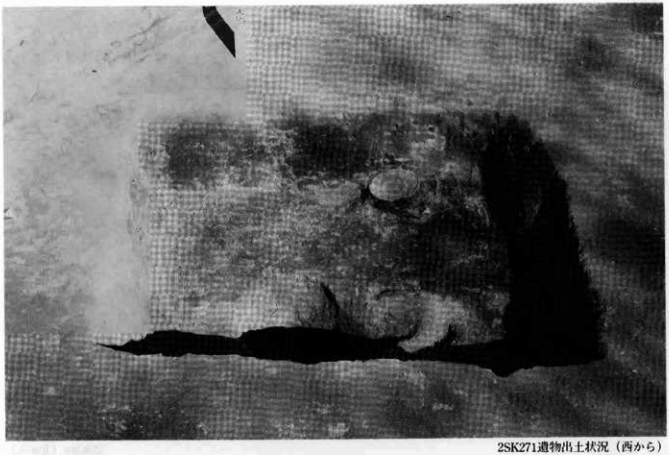
1SI035土層観察（東から）

2SI290（南から）

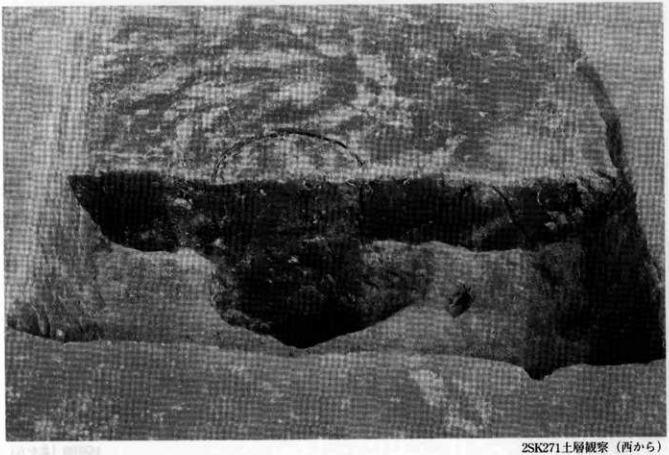
Pla. 4

2SK267土層観察（南から）

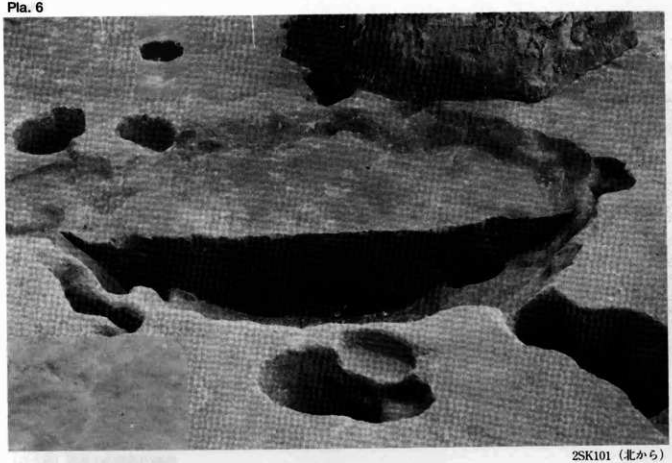
2SK262（東から）



2SK271遺物出土状況（西から）

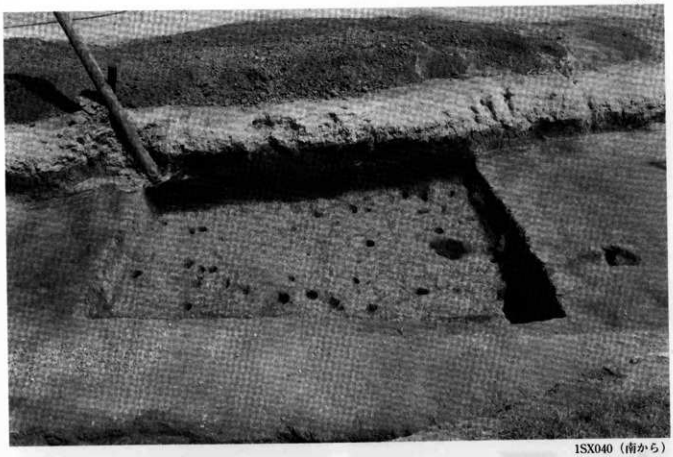


2SK271土層観察（西から）

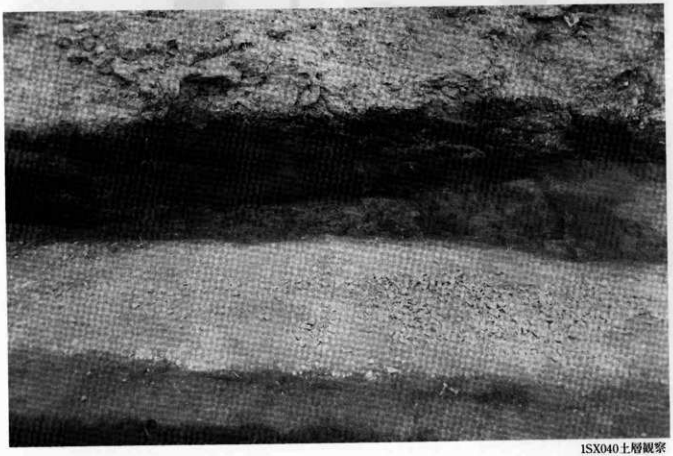


2SK101（北から）

1SX030（北から）



1SX040（南から）



1SX040土層観察

Pla. 8

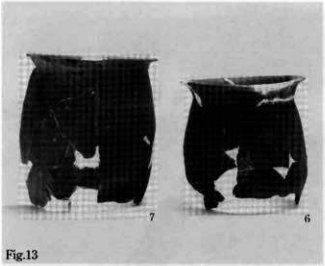


Fig.13

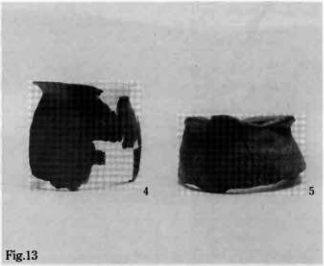


Fig.13

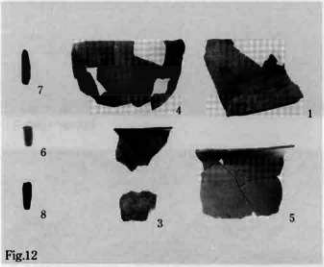
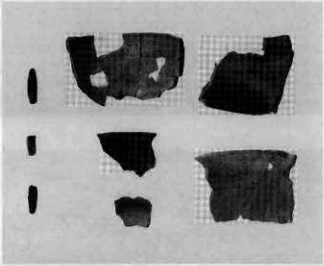
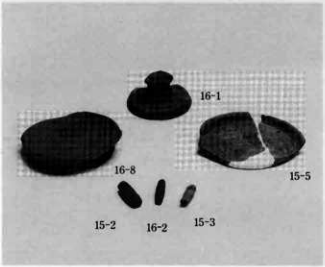


Fig.12





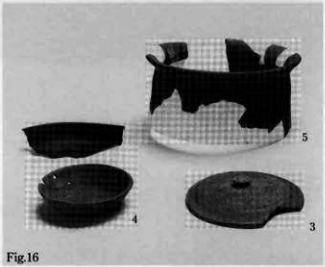


Fig.16

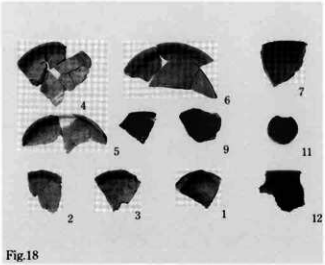
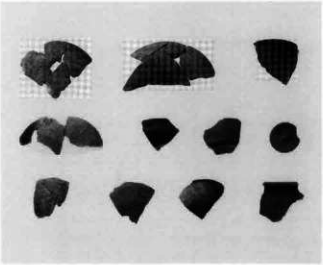
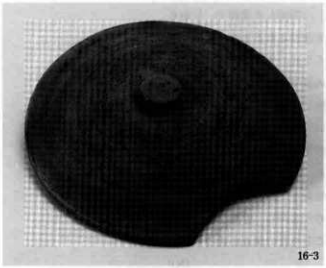
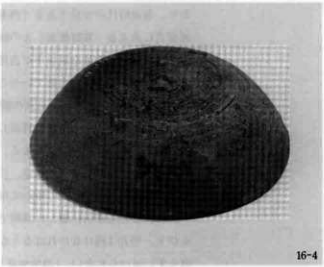


Fig.18

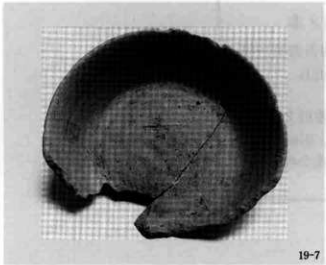




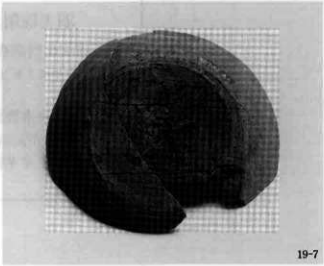
16-3



16-4



19-7



19-7

（編集後記）

本書で報告した羽犬塚射場ノ本遺跡は、前章の小結でも述べたとおり、奈良時代の官道である「西海道」に関連した遺跡で、しかも延喜式にみえる「葛野駅家」との関係も注目されるものである。このことは、我々の住む筑後市が古代から交通の要衝であり、ここ筑後地方で重要な位置を占めていたことの証である。この地の利を生かすことが、今後の本市の発展の鍵を握っているやもしれない。

しかし、遠く古代の情報を埋蔵していた遺跡は開発によって、次々に消滅しているのが現状である。その消滅する瞬間に、我々にその姿の一部を垣間見せてくれる。これが、記録保存のために我々が行う発掘調査である。その中から得た情報をいかに将来に生かしてゆくか、これは非常に難しい課題である。しかし、歴史が科学である以上、努力は続けなければならないことをこの調査を通じて感じ取らずにはいられない。「温故知新」。 (N)

羽犬塚射場ノ本
筑後市文化財調査報告書第17集
平成７年３月15日

発行　筑後市教育委員会
筑後市大字山ノ井898
印刷　アオヤギ株式会社